

第26回言語教授法・カリキュラム開発研究会 全体研究会

——学生の海外スポーツ遠征と国際理解——

◆ 基調講演：「柔道を通じて世界とつながる」

「学生スポーツと海外遠征、交流活動」

+ パネルディスカッション

第26回言語教授法・カリキュラム開発研究会は、「学生の海外スポーツ遠征と国際理解」というテーマで2008年12月6日（土曜日13時～15時30分）に、2号館213教室で開催された。

参加者は、54名であった。今回は、学生の海外スポーツ遠征という観点で、甲南大学スポーツ・健康科学教育研究センターの協力を得て、共同研究会を開いた。

次第

第1部

13時00分 開会の挨拶 国際言語文化センター所長 胡金定教授

13時05分～

基調報告：「柔道を通じて世界とつながる—学生の海外スポーツ遠征と国際交流—」

スポーツ・健康科学教育研究センター教授 山崎俊輔

プロフィールhttp://www.adm.konan-u.ac.jp/front/c_10_sports-kenkou.htm

13時45分～甲南大学柔道部メンバー 「フランス・スイスへの交流遠征に参加して」

司会 国際言語文化センター准教授 柳原初樹

14時00～14時10分 休憩

第2部

14時10分～

基調講演：「スポーツ選手と外国語」

吹田市立第一中学校保健体育教諭 福本幸

（プロフィールは本稿末に詳記）

パネルディスカッション「学生スポーツと海外遠征、交流活動」

パネラー：国際言語文化センター教授 津田信男，講師 Kirk Stanley Arthur

スポーツ・健康科学教育研究センター教授 桂豊，准教授 鶴木千加子

コーディネーター：柳原初樹

司会 国際言語文化センター准教授 藤原三枝子

15時20分～15時30分 質疑応答

15時30分 閉会の挨拶

(内容報告)

第一部基調報告では、山崎教授が過去7回引率された甲南大学柔道部の海外遠征を振り返り、柔道を通じての国際交流の目的、課題、心がけなどについて報告された。過去の遠征先は、下記の通りである。

1987年（天津 中国）、91年（マルセーユ フランス）、96年（ブリスベーン オーストラリア）、2000年（シアトル アメリカ）、01年（ツール フランス）、04年（オランダ、フランス）、08年（フランス・スイス）

最初の海外遠征のきっかけは、1984年に柔道指導者二人が、天津の柔道隊を指導したことが機縁で、甲南大学の柔道部との親善を深め、指導した中国人教え子達の指導効果を確認したいとの思いであった。山崎教授は、中国で肌と肌を触れ合いながら柔道を指導して、「柔道をやっていて良かった。柔道を通じて世界とつながっていける」ことを実感した。この時の感動が原点となって、柔道部の学生主体で、海外遠征を企画・実行させてきた。費用は自己負担で、神戸市の姉妹都市への遠征からスタートしたため、「神戸市友好使節団」という肩書きで遠征を重ねてきた。

事前の心構え：海外に行くからには、練習して強くならねばならない。同時に、相手国の文化、習慣、言葉の事前勉強も必要である。柔道の創始者である嘉納治五郎は、決して日本の柔道を世界に押し付けようとしなかった。逆に世界の武術のいいところを取り入れて、柔道を発展させようとした。嘉納は、合理性、科学性、信頼を尊重した。柔道の指導者には、相手の言葉や文化を学んで行くという姿勢が求められる。

海外遠征の目的：強化、交流、広い視野を持った人間の育成（＝学びに行く）。「黒帯で世界をつなぐ」をモットーにする。強いだけの柔道を目指すのではなく、嘉納の言葉「精力善用 自他共栄」を実践する。参加者は、日本の柔道だけではなく世界の柔道に接し、世界の柔道のあり方を学び、世界の人々の考え方や行動に触れることで、自分を見つめ、自分の可能性を考えるきっかけにする。そして、世界の情勢を日本の共通点、相違点を学ぶ。

阪神淡路大震災で、柔道部員は甲南大学に避難した被災者の方々の支援を行ったが、同時

に海外からの支援にも感謝した。翌年96年のオーストラリア遠征の実施は厳しいものがあったが、「With warmest Thanks from Kobe」をスローガンとして掲げた。「震災を通じて知らない人たちとの温かい交流が出来た。そういうつながりを今度は、柔道で作りたい」との思いで、地震の被害者意識から、支援への感謝を表現する遠征にしたいと思った。

アメリカでの柔道の普及には、大統領セオドア・ルーズベルトや日系の方々の存在が大きい。日露戦争の講和を斡旋したのもルーズベルトであったが、日露戦争の勝利によって、世界は日本の柔道にも関心を抱くようになった。大統領邸には柔道場が作られた。柔道がオリンピック競技に採択された背景にはアメリカでの柔道の認知と評価の歴史がある。

フランスには4回も行ったが、フランスは世界一の柔道人口を誇る。日本の2倍の、約40万人の柔道人口を持つ。フランスの柔道は、生涯スポーツであるところに特徴がある。普及から強化、生涯教育へと進化している。学生たちのホームステイをもフランスの柔道家が工面してくれるほどの強い絆が出来ている。山崎教授は以下の視点で基調報告を締めくくった。

遠征後に学ぶことは、「柔道の素晴らしさを知る／世界に対して興味を持つ／国際親善・世界平和の大切さを知る／感謝の気持ち 責任感を身につける 人々との出会いを大切にすること」ことである。ここから、奉仕すること、ボランティア精神が生まれる。従って学生としては、以下のことを実践することが求められる。

1. 目標設定：柔道，語学，教養を意欲的に身につける
2. 理念（精力善用 自他共栄）を持つ
3. 人と世界に奉仕する人間形成 海外の柔道家をも日本で受け入れる
4. そのために「常に備えよ」
5. 心・技・体を磨く→ 徳育・知育・体育

2008年度フランス・スイス遠征の学生参加者33名（学習院大学生も一部参加）の代表による報告：（主将文学部4回生井上君，副代表理工学部4回生前原君，法学部3回生奥谷さん，経営学部2回生荒東君，同松崎君，イギリスからの交換留学生ジャンさん）

下記に彼らの意見を集約した。

- 日本と違って、一生柔道を継続する人が多い。人間形成にも重点が置かれ、「礼」に始まる柔道の基本姿勢を改めて海外で学んだ。
- 卒業後、柔道をやめるとの発言に「もったいない」と言われた。
- 日本人である自分に真剣に向ってくるので、日本人であることを強く意識し、また誇らしく思えた。
- 日本の子供たちと違って、子供でも、大学生の私に真剣に勝負してくるので、こちらも少し本気になった、本気にならされた。
- 日本で少し言葉を勉強していったが、スイスでは日本語もかなり出来る人もいて反省し

た。

- 最初は、ホームステイ先で遠慮して、こちらから話すことができずにいたが、コミュニケーションを取るのも、自分から行動しなければ駄目だという自覚が出来た。
- フランス・スイス人の大学生は、日本人の自分たちと比べると、年齢が上の人たちとも積極的に交流しており、学生だけで固まる自分たちより社交上手に思えた。
- ホームステイ先の家族が、第2の家族のように思えた。
- 自分はヨーロッパの出身だが、あまりヨーロッパを知らなかったので、留学先である日本で習い始めた柔道を通じて、フランスやスイスに行き、交流が出来たのは良かった。また、日本の柔道だけでなく、世界の柔道と接することができたのも素晴らしかった。
- フランスのナショナルチームメンバーとも試合できたのは良かった。



第2部

基調講演では、福本幸先生が、アスリート（走り高跳び）としての海外遠征の経験をベースに、母校甲南大学教員と学生に、温かく、熱く、そして心をこめて話された。

「私が初めて海外遠征に参加したのは、高校3年生の時にアジア・ジュニア大会に日本代表として参加した時です。開催地はインドネシアでした。英語も通じない中で、参加した他の高校生たちと町に元気よく練り出したのを覚えています。2回目の海外は大学3年生の時のオーストラリアでの日本陸上連盟の合宿参加でした。私は、文学部英語英米文学科に在籍していました。ちょうど試験期間で、単位の問題もありましたが、どうしても参加したかったので、一部の科目の単位を放棄して、参加しました。キャンベラにあるAIS（Australian International Sports Center）という素晴らしい施設で、地元の大学生とも交流できました。英語で話しかけるよりも、日本語が出来る人が多くて、むこうから日本語で話しかけてくれるケースが多かったです。日本語はとてもポピュラーでした。

先ほど、柔道の話が出ましたが、陸上競技は個人単位のスポーツで、選手は試合開始前はかなり、神経質になっており、競技にむけて神経を集中させており、話しかけにくいのが現実です。

私は甲南大学を卒業後は、別の大学の大学院に進学し、保健科学研究科に在籍しました。

陸上競技を継続しながらも、スポーツを研究し、体育教員の免許も取得するためでした。その時は、医学関係の論文をたくさん英語で読まされたりして、医学英語の辞書と向き合いました。卒業後は、中学教諭になりましたが、現在も現役で活動を続けています。ヨルダンなどイスラム圏での試合にも参加しましたが、文化的バックグラウンドの違いでしょうか、男女の競技は別々に行われますし、肌の露出を抑えるように指示され、日本での自由な競技活動のありがたみを感じました。

現在は中学教諭ということもあって、海外の試合に行って、競技をして、そのまま帰国、仕事というタイトなスケジュールで、観光や交流を行う余裕がありませんが、やはり、海外でのコミュニケーションをスムーズに行うためにも英語の重要性は感じています。一人で、競技開催地まで、半日以上かけて移動するさいにも、英語でスムーズに会話ができれば、不安に襲われることもすくないでしょう。一人していると無性に誰かと話したくなってしまいます。また、コミュニケーションが取れることが自信につながります。その意味でも、英語力の上達を自分自身の課題としております。ご清聴ありがとうございました。」

福本先生の基調講演に引き続きパネルディスカッションが行われた。以下にその概要を記す。

コーディネーターからの質問：津田先生は、国際交流センター長も務めておられますが、甲南大学国際交流センターは学生スポーツの海外遠征をどのように支援しておられますか？

津田：まずは、事務的な返答で申し訳ないですが、国際交流助成という制度があり、申請していただければ、助成金が支給されます。今回の柔道部の遠征に関しては、助成金が支払われました。その他に、海外語学講座、留学に関してオリエンテーションを行っています。お国事情、習慣、危機管理の情報を提供しています。個人的な意見ですが、そのようなオリエンテーションを行ってあげたら良かったかもと考えています。将来的には、必要があれば相談していただきたく思います。

質問：海外遠征支援から、どのような成果というか、今後の学生の国際交流への意識変革を望んでおられますか。

津田：海外での柔道の試合や練習を通して、各自の競技力の向上を図ると共に、肌と肌との交流を行うことにより、新の国際親善を図ることを目的として欲しく思います。

私自身のアメリカの母校はスポーツが盛んで、アメフトが強いです。BYUの留学時代、関学のトレーナーも留学しておられました。可能性としては、日本のアメフトチームがアメリカの大学に行って、コーチから指導を受けて向こうの学生と一緒に練習を行えば、意識改革になると思います。新たな目標を見出して、技術の向上に繋げる。改善点を見出すことができるのではないのでしょうか。

質問：語学の向上という観点からはどう考えておられますか。

津田：個人レッスンの経験を薦めます。自分は語学が苦手だと思っている、これがスポーツ選手の特徴です。しかし、スポーツ選手は相手を観察し、相手の動きを認知したり、予測したりする訓練を積んでいるので、知能（対人的、内省的知能、自己管理能力）が高く、語学の向上が望めると思っています。

また、スポーツ推薦クラスの授業担当の経験から、スポーツ選手の積極的姿勢を評価しています。間違いを恐れない、答えられるとリズムをつかみやすい。裏返せば、すぐに頭に乗るとも言えますが。（笑い）

最後に、ゴルフ部の卒業生で、一人はプロを目指してゴルフ留学、もう一人は、カリフォルニアで語学留学している人もいることを知って欲しく思います。

質問：次に、カナダ出身のStanley先生にお伺いしたいのですが、カナダではナショナルスポーツのようなものがありますか。カナダと言えばアイスホッケーを思い浮かべますが、英語圏とフランス語圏の違いを超えて、アイスホッケーは国民的なスポーツですか。

Stanley：私は、スポーツ異文化論の専門家ではありませんが、子供の頃に体験したアイスホッケーのステータスの変遷について話したく思います。私は、カナダの大平原にある小さな田舎町で育ちました。私たちのような田舎で育った人間にとっては、アイスホッケーは宗教のようなものだったといっても過言ではありません。プロアイスホッケー選手は憧れのNo.1でした。毎日、学校が終わって帰宅すると、スケート靴に履き替えて、野原を駆け抜け、野外リンクに行ったことを思い出します。毎日くたくたになるまで、週末も興じていました。私たちカナダ人にとってはアイスホッケーがカナダの象徴であり、アイスホッケー＝カナダだと信じ込んでいました。

次に、イギリス系カナダ人とフランス系カナダ人の架け橋としてのアイスホッケーについて話させてください。皆さんご存知のように、カナダの公用語は英語とフランス語です。私が子供の頃には、イギリス系カナダ人の多くがフランス系カナダ人について偏見を抱いていました。しかし、アイスホッケーのヒーローの多くはフランス系カナダ人だったのです。彼らが試合で活躍すると、相手に対する偏見は一時的になくなりました。また、私たち子供は、ヒーローの影響もあって、フランス語を勉強し始めました。フランス語の授業では、自分にアイスホッケーのヒーローのフランス語の名前までつけました。友人の何人かは、フランス語の勉強のためにケベック州までホームステイに出かけました。アイスホッケーは、実際に架け橋になったと思います。

質問：カナダのアイスホッケーは有名ですが。ロシアやチェコもアイスホッケーは強いですね。先生は、カナダのアイスホッケーがNo 1だと思っておられましたか。

Stanley：1972年、当時私は小学生でしたが、カナダのオールスター選手が旧ソ連のナショナルチームと対戦しました。殆どのカナダ人は、その大会で初めて国際的スポーツとしてアイスホッケーを見ることになりました。まだ、冷戦の最中でしたから、その試合はスポーツの枠を超えて、善と悪の壮大な戦いのように受け止められました。皆はカナダの楽勝を信じていましたが、カナダは苦戦をして、かろうじて最後に劇的な勝利を収めました。私たちカナダ人はソ連の選手の速さと技術の高さに驚き、アイスホッケーは最早、カナダだけのものではないと気付かされました。その後のヨーロッパには強いチームが次々と生まれました。アメリカもそうでした。アイスホッケーの国際化が進んだもう一つの大きな原因は、ソ連の選手が北米のプロチームと契約を結ぶことが認可されたことにもあります。かつては宿敵だったソ連選手が、北米のプロチームにもやって来て、人気を博しました。ヨーロッパからもスター選手がやって来ました。最近では、欧州で活躍しているカナダ人選手もいます。アイスホッケーは北米と欧州を結ぶ架け橋となりました。

アイスホッケーは今でもカナダの象徴ですが、もはやカナダ一国のものでないことは明らかになりました。カナダで活躍する選手の国籍も多様です。しかし、それによって各国の選手の様々なプレースタイルが試合を盛り上げ、カナダや世界中のファンを魅了しています。

質問：次に、スポーツ研究・健康科学教育研究センターの桂先生にお伺いしたいと思います。先生は、サッカーの選手、コーチ、引率を経験されて来ましたが、これからの日本のサッカー選手あるいはコーチに求められる資質はどのようなものであるとお考えですか。

桂：1991～1992にオーストリア在外研究（6ヵ月間）を経験させていただきましたが、元ジェフGM 現フランス グルノーブルGMの祖母井氏の紹介で様々な方と知り合う機会を得ました。例えば、FKオーストリア ブランコ・エルスナー氏（スロベニア元ルビヤナ体育大学教授、当時FKオーストリア総監督、元ブランメル仙台監督）などは、スロベニア語、ドイツ語、ロシア語、クロアチア語等を話していましたが、この環境で指導者になるためには、数ヶ国語をこなせないと駄目だと言っておられました。ヨーロッパの多くの指導者、選手が複数の語学を勉強していることが多いことを現地で目のあたりにしました。

また、英語を話せるコーチと一緒にU-10を中心に3ヵ月間帯同した時のことです

が、「英語？それともドイツ語？」と会話する前によく言われて「どちらも少し」とよく答えていました。大事な話をする時は、ドイツ語を話せる知り合いに通訳してもらいました。子供たちとは英語を話していましたが、当時は年代が上になると英語を話さない人が多かったです。私たちの日常目になっている、耳に入れている外国語は英語が圧倒的に多いことを実感しました。

しかし、自分自身、最初は言葉が耳に入ってこなかったのですが、1カ月ほどして突然聞こえるようになったのは驚きでもあり、喜びになり、自信につながりました。

次に海外遠征についてですが、1995年に関西選抜スロベニア遠征に約10日間帯同しました。

本隊：大阪—イタリア—スロベニア—イタリア—大阪

北朝鮮籍選手2名と私：大阪—オーストリア—スロベニア—オーストリア—大阪

選抜選手選考後、韓国籍選手と北朝鮮籍選手が混在することが判明し、北朝鮮に問い合わせたが北朝鮮から回答が何か月も来ずに、北朝鮮籍の二人がイタリア入国を認められないため、オーストリア・ウィーンで生活したところのある私が2人を連れてオーストリア経由でいくことになりました。今から振り返ると、片言の語学力でも生活習慣に慣れていたので実行できたのだと思います。

2003ユニバーシアード代表オランダ遠征（10日間）

イングランド遠征がSARS騒動で中止となり、その代替としてオランダ行きが決定。

全日本学生選抜やユニバーシアード代表の遠征を通して

まがりなりにも全日本学生の代表であるが、海外の遠征では必ずしも恵まれた環境にはなく（お腹をこわす、荷物が行方不明、試合相手が来ない、ホテルや移動用バスの空調がきかない、水のシャワーしか出ない等）、逆に何が起ころうともおかしくない状況の中でサッカーをしなければならぬということで学生たちが鍛えられ、成長していくことを目の当たりにしました。ユニバーシアード代表の活躍（3大会連続金メダル獲得）が認められ、日本協会からも海外遠征を割り当ててもらえるようになりました。そして、ユニバーシアード代表経験者の殆どが卒業後Jリーグで活躍しています。

2003～2004スロバキア在外研究（5ヵ月間）

元ジェフ監督 ベングロシュ氏を訪ね、スロバンブラチスラバというスロバキアリーグの強豪チームを中心に視察しましたが、英語の通じない環境を体験しました。

サッカーと語学について

フジテレビ系列スポーツ番組 サッカー解説者 風間八宏氏の話を紹介させていただいたと思います。風間氏は、大学卒業後、初めてドイツに渡り、プロサッカーに挑戦。サッカー

さえ出来れば認めてもらえるだろうと簡単に考えておられましたが、会話が出来ない日本人にはパスがまわってこなかった。チーム内でも浮いていたそうです。しかし1年が過ぎようとする頃、ドイツ語による会話の必要性を実感し、ドイツ語を猛勉強。通訳を通さずに会話が出来ようになり、チームメートからも認められ、パスが来るようになった。チームプレーのレベルは上がり、スタッフ、チームメートからも信頼されるようになり、チームの中心選手となり、プロリーグ昇格の原動力になったそうです。

自分の言葉で選手や監督と会話出来ることは重要です。イタリアで活躍した中田選手を思い出してください。彼は、イタリア語を話し、現在は英語を使って世界中でサッカーを広めています。

質問：桂先生、ありがとうございます。最後に鶴木先生にお話を伺いたく思います。先生は、今やオグシオで国民的関心の高まってきたバドミントン選手として学生時代から活躍され、現在はコーチ、指導者としてもご活躍中です。

鶴木：私は学生時に学生日本代表として、その後日本代表として、海外遠征を経験したことがあります。日本代表を、(1)日本の顔となる牽引者、(2)日本代表の常連者、(3)日本代表になったことがある者、の3つに分類しますと、陸上の伊東先生は(1)で私は(3)といった所でしょうか。

それまで外国語と言えば英語、第二外国語としてドイツ語に触れる機会があっただけでした。遠征といっても、大会参加と親善試合では全く異なります。大会参加のためには、自分のパフォーマンスを最大限に出すことだけに集中し、練習場所、練習時間、練習相手の交渉などに必要な交渉力が必要でした。バドミントンは打つ相手が必要ですので、いかに練習相手を見つけるかも大事なことです。親善試合では、先方の選手と1週間ぐらい一緒に都市を転戦することがあり、文字通り「親善」をはかる必要がありました。英語が中心でしたが、極力、先方の言語を使うことを心がけました。例えば、「自己紹介」や「良いプレーだ」、「良くないプレーだ」、「このシャトルは良い」、「このシャトルは悪い」、「暑い」など簡単なものだけでしたが、それだけで次の試合で会った時に話がはずみました。現在でもその時の交流を通して、仕事（資料や情報収集）ができています。

2. 学生引率の経験

私がみているバドミントン部では、柔道部のような定期的な遠征はしていませんが、昨年度は強化の一環としてマレーシアの「ヌサマハスリ・バドミントン・クラブ」に遠征をしました。交流のあった人が運営するクラブで、世界のトップをいくマレーシアの選手の育成をしています。そのクラブでは、世界トップからジュニアまで幅広く指導されています。

向こうでは、先方のコーチに学生の指導をお願いしました。説明は英語です。学生は、最

初は私に助けを求めていたのですが、だんだんと理解できたり、質問したりするようになりました。必要は発明の母ではありませんが、必要に迫られたことが良かったのだと思います。

3. 留学生について

現在、スポーツ・健康科学教育研究センターでは、留学生に対して「生涯スポーツ科目」への参加というサービスプログラムを実施しています。生涯スポーツは数科目（種目）実施しているのですが、各科目2名（状況に応じて増員）の枠を設けて提供しています。

留学生たちは、非常に熱心に参加してくれています。留学生達は、一緒にスポーツをすることで、日常的に使用する言葉に慣れたり、身体活動に関する言葉の学習をしているようです。

その様子を見て感じるのは、「スポーツは共通のものである」と同時に、「スポーツでローカル（日本的）なものを体験できる」ということです。近代スポーツは、土着的なものを排除し、ルールを共有できるものにした所からできてきました。したがって、他の国でそのスポーツを経験した者でも、すぐに一緒に楽しめます。一方で、集合のさせ方や、説明の仕方、順番の決定の仕方などを経験することで、日本的なことを体験できているようです。

コーディネーター：先生方、興味深いご報告ありがとうございました。

この後、フロアーとの質疑応答があった。紙面の関係で若干例だけを紹介する。スポーツが盛んで有名な別の大学の先生からは、甲南大学の柔道部の学生はこの先生の大学のスポーツ学生に比べて、「遥かにコミュニケーション能力が高い。事前に質疑応答の打ち合わせをされた」のかとの質問があった。勿論、事前打ち合わせはなかったと返答した。本学の柔道部の学生からも、「単なる肉体的に強いだけの柔道馬鹿にはなりたくない」との発言もあった。津田先生の指摘された、对人的知能と内省的知能のバランスの取れた発展と彼ら自らが無意識に取り組んでいる証左となる発言で締めくくることが出来た。

福本（旧制 青山）幸先生

陸上選手としての経歴：

- 中学3年で今現在も残る大阪中学記録となる、1m72cmを跳び全日中優勝。
- 高校進学後も記録を伸ばし、高校3年では全国ランキングは1位でありながらもインターハイでは2位。高校時代の自己ベスト1m81cmは高校歴代5位タイ。
- 甲南大学入学後はヘルニアに悩まされ、目立った活躍はならなかったが、WWA（ワールドワイドアスリート）時代に国体成年女子走高跳を初制覇し、翌年も優勝し連覇達成。
- 中学教員になり1年目も優勝し3連覇を達成。
- この年自己ベストを更新する1m92cmを記録し、アテネオリンピック参加B標準をクリ

アしながらも夢の五輪出場は叶わなかった。2005年全日本実業団選手権で3連覇を達成。国体は棄権し、連覇はストップ。

- 2006年は日本選手権でハニカット陽子を下し、初優勝、国体も4度目の優勝を飾り、ドーハ・アジア大会に出場し5位。
- 2007年春先から3年ぶりとなる1m90台を跳び、全日本実業団選手権5連覇達成。
- 日本選手権も2連覇、アジア大会では5歩助走で1m88cmをクリア。
- 世界陸上大阪大会に出場し、1m84cmで予選落ち。

[編集] 主な競技歴

全日本中学校陸上競技選手権大会女子走高跳優勝

日本学生陸上競技対校選手権大会女子走高跳優勝

日本陸上競技選手権大会女子走高跳優勝

文責 柳原初樹
津田信男